

# 青山会 会報四号

## INDEX

・会長挨拶	1	・在校生より	11
・学部長より	2	・支部だより	13
・新任教員より	3	・研究室のいま	15
・OBより	5	・卒業生進路について	16



## 青山会会員の皆様、

## 農学部獣医学科同窓生の皆様

青山会会長 深町 輝康 (V16)

山口大学獣医学部同窓会（青山会）の皆様、農学部獣医学科の卒業生の皆様、各界でご活躍のことと拝察申し上げます。青山会会報第四号は関係各位のご尽力により刊行することが出来ました。皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

今年もコロナ禍で様々な活動が制限され、経済的にも厳しい状況ではなかったかとお見舞い申し上げます。感染が下降に減じつつありますが、このまま終息に向かうことを念じています。

今年2月、ロシアは突然ウクライナに侵攻し、いまだ和解の兆しが見えない状況であります。8月には8年近く日本の経済財政再建に尽力し、また世界の平和外交を牽引し、その手腕を内外から高く評価されていた安倍元首相が暗殺されるという、驚愕する事件がありました。そしてこの事件は統一教会問題へ波及、経済再生に死力を尽くしていた山際先生は大臣辞任へ追い込まれることになりました。山際先生には再

を期して頑張って頂きたいと思います。

同窓会活動はコロナ禍の状態で一昨年、昨年と思うような活動が出来ず、残念にまた心苦しく思っております。引き続き会員の拡充、同窓会誌充実、ホームカミングデイの成功、地方組織の充実など取り組むべき課題が山積しています。

山口大学は9学部、21学科、10の大学院を有する、学生総数10,000人を超える地方大学としては最大規模を誇る総合大学（山口大学ホームページ）であります。

共同獣医学部の濫觴は1883年（明治16年）、山口栽培試験場農事講習会獣医科との記録があります。明治、大正、昭和と時代は移り、1944年（昭和19年）、山口高等獣医学校が設立され、1949年（昭和24年）国立学校設置法により新設山口大学の農学部獣医学科へ編入され（[200周年山口大学の来た道4 \(yamaguchi-u.ac.jp\)](http://200周年山口大学の来た道4.yamaguchi-u.ac.jp)）、その後2012年共同獣医学部へ昇格、10年が経過しました。一昨年（2020）欧州獣医学教育機関協会の認証を取得、日本ではトップレベルの教育、研究棟を誇り、今年3月にはすでに共同獣医学部4回生30名が卒業、獣医師国家資格を取得し、それぞれの分野で活躍中であります。

2024年（令和6年）、獣医学科の前身である山口高等獣医学校が設立されてから、80周年を迎えます。同年のホームカミングデイに合わせ、創設80周年記念事業を計画しております。山口獣医畜産専門学校から農学部獣医学科へ続く同窓生の皆様、青山会の皆様、この度の獣医学科創設80周年記念事業にご協力、ご参加をお願い申し上げます。

皆様のお力で是非とも成功させたいと祈念いたします。どうぞよろしくお願ひいたします。



## 令和4年度

### 共同獣医学部の近況報告

共同獣医学部長 度会 雅久

山口大学共同獣医学部同窓会・青山会の皆様におかれましては、ますますご健勝のことと存じます。

このたび4月1日付けをもちまして、山口大学共同獣医学部長に就任いたしました。皆様のご支援とご協力を賜り、精一杯努力していく所存ですので何卒よろしくお願いいたします。また、会員の方々には、日頃から本学部の教育研究にご理解とご協力をいただき、この場をお借りしてお礼申し上げます。簡単ではございますが、本学部の近況についてご報告させていただきます。

コロナ感染は一時的に減少傾向にありましたが、すぐに第7波が到来し、感染が拡大している状況です。本学においても、一定数の感染者が発生しております。基本的な感染対策を徹底し、滞りなく教育研究を行なっております。

教育研究に直接関係しない行事は、この2年間、中止になっていました。今年度は感染予防に留意し、実施可能となりました。本学部学生と教員が参加するソフトボール大会は、幹事の3年生の熱意により、実施することができました。久しぶりのレクリエーションで、学部内で親睦を深めることができました。幹事が中心となり上級生がサポートすることによって、感染対策マニュアルを作成しました。

公衆衛生学の勉強にもなったようです。続いて、これも3年生が幹事となり、山口大学七夕祭に参加することになりました。例年は飲食店を出店していたようですが、今年度は飲食が中止になりましたので、動物ふれあい企画となりました。学部の保有するポニーとヤギに触れ合う企画でしたが、大変盛況だったようです。3年生はコロナ禍初年度の学生であり、入学式をはじめ各種イベントが全て中止となった学年です。当初は友達づくりに苦労したと思いますが、本学部のアットホームな雰囲気が助けとなり、それなりにうまくやっているようです。

本学には学生主体企画への支援として「おもしろプロジェクト」というものがあります (<http://ssct.oue.yamaguchi-u.ac.jp/omoprohp/index.html>)。このプロジェクトに採択されていた、本研究科の大学院生と本学部の学生がそれぞれ、「山口大学に生息する野生哺乳動物の多様性調査」と「みんなでHappyホースライフ!」のプロジェクトで学長賞を受賞しました。前者については、吉田キャンパス内に生息している野生哺乳動物種を把握し、野生動物図鑑を完成させました(ダウンロード先: <http://ssct.oue.yamaguchi-u.ac.jp/omoprohp/news/yammalogy.pdf>)。後者については、人と馬が触れ合うことで安らぎを得るホースセラピーに注目し、多面的に馬と社会がつながる機会を提供しました。今後の発展がさらに期待されます。



〈山口大学野生哺乳動物図鑑 (2021)〉

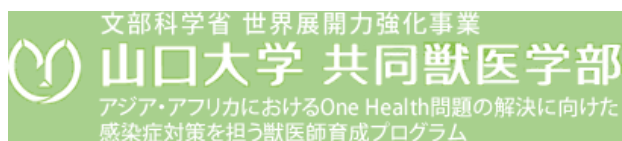
研究活動にも特筆すべき成果が認められました。昨年から今年かけて、本学部から立て続けに3報、The Proceedings of the National Academy of Sciences (PNAS, 米国科学アカデミー紀要)に論文が掲載されました。PNASは世界で最も引用の多い総合科学誌のひとつで、掲載された論文は高く評価されており、掲載 URL です。

- 1) <https://www.pnas.org/doi/pdf/10.1073/pnas.2114258118>
- 2) <https://www.pnas.org/doi/full/10.1073/pnas.2110256119>
- 3) <https://www.pnas.org/doi/full/10.1073/pnas.2114441119>

この3報のうち1報は学部学生が筆頭著者です。本学部の研究力の高さを物語っているものと思われます。お時間のある時に論文に目を通していただければと思います。

国際交流も本格的に復活してきています。2021年から大学の世界展開力強化事業「アジア・アフリカにおけるOne Health問題の解決に向けた感染症対策を担う獣医師育成プログラム」が開始され、今年度はナイロビ大学との本格的な交流が行われています。ナイロビ大学の教員と学生の受け入れが10名程度、および本学部の教員、学生、大学院生の派遣が15名程度の規模です。また、JICA草の根事業「ジョグジャカルタにおける農業従事者の生活向上のための牛繁殖効率の改善」ではインドネシアとのオンラインセミナーが月1回のペースで開催されています。ガジャマダ大学の研究者との相互交流も開始されました。今後さらに国際的ネットワークの構築を進めます。

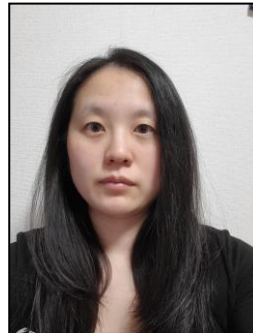
本年度は谷澤幸生学長が新たに就任し、大学執行部も一新されました。この地域の大学として、地域の抱える社会課題を地域の企業や教育機関、行政機関と協働し、産学公連携の知の拠点として、優秀な人材を提供するとともに地域のシンクタンク機能を果たし、課題の解決に寄与することにより、地域に頼られ、地域から必要とされる魅力ある大学を目指すという新たな目標を掲げています。本学部もこの方針に基づき、教育研究に邁進してまいります。



<https://ds0n.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~sekaitenkai/index.html>



## 新任教員より



獣医病理学分野  
吉寄 響子

2022年4月より獣医病理学分野に助教として就任しました吉寄響子です。岩手大学農学部動物科学課程を2011年に、岐阜大学応用生物科学部獣医学課程を2017年に卒業しました。2017年4月から小動物臨床を1年経験し、2018年から岐阜大学の大学院に進学しました。大学院在籍中も4年間、臨床獣医師としてパート勤務を続けました。岐阜県では大学院1年目の2018年、豚熱が発生し、その際には家畜保健所に協力し、獣医師免許を持つ教職員、大学院生も動員されました。大学院では、ジャック・ラッセル・テリアの遺伝性消化管ポリポーシスの研究をしていました。

山口は、実家の長崎に近いこともあり今まで住んでいた岩手県や岐阜県よりも土地の雰囲気馴染みがある気がします。現在、臨床離れましたが、今までの臨床を含めた様々な経験を活かしつつ、面白い研究ができればと考えています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

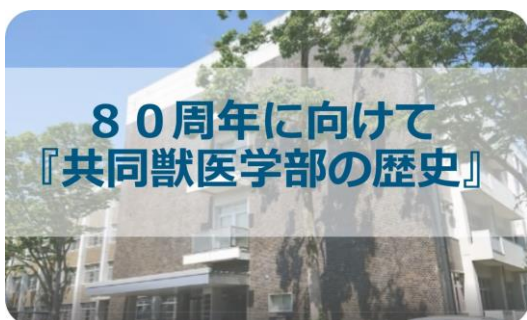
### ～青山会よりお知らせ～

#### 第10回山口大学ホームカミングデーが開催されました

令和4年度10月29日、第10回のホームカミングデーがオンラインにて開催されました。

過去の動画に加えて、「80周年に向けて『共同獣医学部の歴史』」と題した動画を公開しております。視聴期間の制限はございませんので、ぜひ御覧ください。

[https://www.yamaguchi-u.ac.jp/alumni/hcd/hcd2022\\_yoshida/](https://www.yamaguchi-u.ac.jp/alumni/hcd/hcd2022_yoshida/)



## OBより

### 角帽去り町勢衰退一途

元 山口県衛生研究所病理部長・医学博士  
山縣 宏  
(山口獣医専3期)

#### 1. プロローグ

筆者は、山口大学共同獣医学部の前身である旧制山口獣医専の創立、発足の地、吉敷郡小郡町（合併して山口市小郡）に、第2次世界大戦（WWⅡ）に日本が大敗して連合軍占領軍の支配下に在った6年余を含め、戦前、戦中、戦後と満93年余生きて、町勢の盛衰、推移を見聞してきた。

現時点、急加速で衰退する町勢を、往時の小郡町を知る者として、旭日と夕日の差に比するに忍びない思いで見ている。

#### 2. 町勢衰退の起因

町勢繁栄の最盛期は、1939(昭14)～1948(昭23)年の約10年余で、往時を知る町民、古老の斉しく評価するところである。町勢発展の基盤と活力は、交通機関（小郡駅、操車場、機関庫）と、高等教育機関（山口獣医専）の2つの所在、寄与が大であった。

因みに、前者は中・四国最大の交通運輸の国家機構、組織であり、後者は中国、四国、九州地域で唯一の単科の獣医学高等教育機関であったことに拠る。これら2つの機関の去就、消失が町勢衰退の端緒となった。

#### 3. 小郡町民と山口獣医専学生

元来、日本の学生は制服制帽着用者で、一見して学生と認識、判別可能で、社会世人が大事に取扱ったものである。

因みに、旧制大学生は角帽、旧制高等専門学校生は丸帽、但し、医学・獣医学の単科の専門学校生は角帽であり、山口獣医専の1～5期生は角帽であった。

山口獣医専所在地の小郡町民は、角帽のエリート学生を愛し大事に取扱っていた。今にして当時を偲べば、人心温かな古き佳き時代で学生は幸せであった。

#### 4. 町勢衰退の第1弾：山口獣医専の下関移転

1944(昭19)年4月創立発足の山口獣医専は旧制県立小郡高等女学校移転後の空校舎を仮校舎として発足した。県当局は新築を計画したが、戦時下で先送りとなった。1947(昭22)年、日本占領連合軍総司令部（GHQ）が山口獣医専、慶応義塾獣医専、宇都宮農専獣医学科の3校の廃校を命令したが、山口獣医専は下関に移転して廃校を逃れた。慶応と宇都宮は廃校となり消滅した。

小郡町内から角帽の若い学生たちの闊歩する姿が消えたのを契機に町内に漂う異様な寂れた空気は町勢衰退の始発の要因のひとつとなった。

#### 5. 町勢衰退の第2弾：SL廃止と交通、運輸機構の縮小、廃止

国鉄山陽本線の電化とともにSLの運用が急速に縮小、廃止となる大きな流れの中で、巨大機構の操車場、機関庫の廃止、解体と消失は小郡駅の運用規模の縮小と相俟って、町勢衰退に第2弾となる巨大打撃であった。

#### 6. エピローグ

山口獣医専が下関市に移転することで、日本占領連合軍総司令部（GHQ）の軍政下の廃校命令を逃れたことは、奇跡である。廃校になっていれば、現在の山口大学共同獣医学部は存在しないと断言可能である。

山口獣医専の創立に、県当局と並んで巨額の設立資金を支出提供した小郡町であったが、敗戦国の小さな一町の財政規模では獣医専の下関移転を引き止めることが不可能であったことが惜しまれる。

## 県庁時代の出会い

(公財) 山口県生活衛生営業指導センター しろがね まさとし  
白銀 政利

(V31)



〈R3. 3. 31 県庁県政資料館前での記念撮影（卒業式後）〉

私は、昭和60年に山口県庁に入り、保健所、動物愛護センター、本庁など主に公衆衛生分野で公務員獣医師として36年間勤務した後、令和3年3月末に県を定年退職しました。同年4月から公益財団法人で経営指導員として、獣医学とは無関係な業務に就いています。

大学時代は、家畜解剖学教室に在籍し、鬼籍に入られた木脇祐順教授と牧田登之助教授に指導を受け、ニホンザルのマクロ解剖や犬の動脈内膜剥離後の修復過程のミクロ観察を行っていたことが記憶に残っています。1学年上には、4人の個性豊かな方々（阿川、荒木、上田、杉浦先輩）がおられ、日付の変わる頃、研究室で牧田先生のダルマ開栓を合図に始まる懇親の席で色々な話をしたことが楽しく思い出されます。

就職に当たり、6年の長い間大学に通わせてもらった両親を安心させるべく、県内での就職先をと考え、一大企業である県庁（衛生獣医職）を選んだというのが、今思えば入庁の動機だったと思います。

公衆衛生分野の教科については、上っ面の知識しかなく、県に入って一から勉強しなければならず、

疑問を即座に解消可能な環境にある学生の有難さを早くも感じさせられたのは言うまでもありません。

また、公務員には一定程度の文章能力が必須だということも入庁数年で痛感しました。考えてみれば、何か物事を行おうとすれば、上司・先輩との協議のみならず、沢山の関係者や県民にその内容を伝えることが必要となります。その際、最も効率的・効果的な方法は「話す」だけでなく、「見せる」ことなのです。リスクコミュニケーションの分野では、「人は、自分が話そうと思った瞬間に、人の言うことが聞こえなくなる」という現象を習いました。伝達は、視覚で補うことにより、正確に短時間で行うことが可能となるのですが、その際、媒体となる文章とポンチ絵の作成能力が大きくものを言うこととなります。こうしたことを切実に体感したのは、ここ十年内のことであり、部長、副知事、知事との協議という機会を通じてでした。逼迫した状況に追い詰められないと、本当の意味で身に付かないものです。

私は、基地の町の一つ”岩国市”の出身で、大学から就職まで県内生活で完結する人生を送っており、そのまま卒業まで迎えられるものと思っていました。しかし、どうした手違いか、43歳を過ぎた年に、いきなり都内生活を送ることになりました。県東京事務所と内閣府食品安全委員会事務局というところで4+4年間勤務することになり、それまでとは全く異なる分野の業務に就くことになりました。

まず、東京事務所では、国会議員事務所秘書の方々とのやりとりを行ったことが良い経験になりました。それまで、政治家の関与は余分な仕事を増やし、対応にかなりの労力を要するものという認識だったので、できるだけ近寄らないようにしていたのですが、業務上、深く付き合わざるを得なくなりました。実際に、秘書の方々とのつきあいを通じて感じたことは、処理を要する案件が無理筋なのか、本気度の高いものなのかは、直接会うことによって察することができるということでした。時には、落としどころを示していただくことさえありました。特に、政策秘書の方々は、資格試験を合格したエリート公務員であり、多種多様な情報と幅広い人脈を背景に、高度な政策立案・実行能力をもっておられることがわかり、自分の視野が如何に狭かったかを痛感させられました。



〈職場の座席後ろの窓からの風景（赤坂パークビル 22階）〉

次に、内閣府では、国の職員として専門家の先生方とふれあう機会を得たことが新たな経験となりました。内閣府の一委員会である食品安全委員会では、国立感染症研究所の所長や部長、東京大学などの国立大学教授の方々とリスク評価について議論をまとめていく仕事を行っており、大学卒業後20年ぶりに英語と格闘せざるを得ない厳しい環境で、先生方の議論に何とか食らいついていったというのが当時の印象です。食品安全委員会は、狂牛病の国内発生を契機に、平成15年にできた新しい組織で、事務局は農水省、厚労省、他省庁、地方自治体の出向職員からなる寄り合い所帯でした。それぞれの役所の文化や仕事の進め方が異なるため、沢山のトリビアがあり、本当に興味深い楽しい時間を過ごすことができました。例えば、決裁文書の決裁欄には、決裁権をもつ課長・室長のみが職名を記載されており、課長補佐や係長などは閲覧時に欄外に押印していることに本当にびっくりしました。県では、閲覧される主

任、担当まで職名を列記していたので、何の疑いもなく普段どおり決裁を回したところ、直属の上司(私より15歳年下)から「国では違うよ」ということを指摘され、目が点になりました。慣れ親しんだ習慣が、その世界では異なるものであったことを初めて知った、未だに忘れられない経験です。また、決裁に先立ち、各課の課長補佐に口頭説明を行って回る訳ですが、本当に優秀な方(法令担当)と話す時、質問の順番と答の引き出し方から、説明する私の頭の中がスッキリと整理され、ぼやけていた視野の焦点が細部まで合うような、不思議な感覚を覚えたことが印象に残っています。

当時は、委員長が見上彪先生(獣医初の委員長)でしたので、毎週木曜日の18時頃(我々の勤務時間は18:30まで)から「見上バー」が始まり、80人近くいる事務局職員だけでなく、先生を頼って来所される厚労省・農水省の職員(先生の教え子を中心に)や幅広い分野の先生方と酒を酌み交わして話をする機会に恵まれ、様々な知見を得られる本当に貴重な経験となりました。見上先生は、自治体出身の職員との話がお好きで、私も内線電話で「手が空いたら委員長室に」と、いつもご案内をいただいていた。

異文化に触れ、充実した東京生活を送った8年間も終わりを迎えた3月11日14:46に、職場で震度5強の揺れに遭遇し、いつまでも止まらない建物の揺れの中で船酔いのような感覚に陥りました。幸いにも帰宅難民にはならず、徒歩で2時間かけて帰宅できました。暗い中、沢山の人が道路にあふれ、歩道をひたすら歩く、少し殺気立った状況の中で家路に向かうという貴重な体験をしました。



〈動物愛護センターに来たばかりのショボ君(♂3週齢?)〉



山口県に戻ってからは、本庁の複数の課と保健所勤務を経験した後、動物愛護センターに異動となりました。ここでは、私の人生で大きな転機となる出会いが待っていました。ここは、春に桜のアーチ・並木が迎えてくれる、緑とため池に囲まれた自然豊かな立地環境にあります。2万5千㎡の敷地と、ふれあいサークルや動物舎、運動広場、散策道が設けられた、「愛護」の名に相応しい、ゆったりとした時間の流れを体感できるところです。県庁生活で初めて個室の執務環境を与えられた職場でもありました。そこでの業務は、動物の「愛護」と「管理」という二種があり、後者については、各保健所で引き取り、収容した犬猫の回収と処分です。処分数が減っていた当時でも、年間700~800程度の安楽死処分を行っていました。鎮静剤と過量の麻酔薬投与により行っているのですが、対象動物のほとんどは目の開かない、生後間もない子猫ばかりです。この処置は、精神的負担が大きく、私を含む3名の獣医師は、できるだけ処分数を減らそうと、ミルクやり対象となる子猫の数を増やし、土日には、職員が家に連れ帰り、世話をしていました。折しも、一軒家に住み始めたばかりでしたので、私も土日に子猫を家に連れ帰りました。5匹の兄弟猫(♀4, ♂1)を連れ帰ったとき、体格が最小で、不器用、食べるのが遅い♂の子が何故か気になりました。体格も毛並みも「ショボい」子だったので、妻が「ショボ君」と仮り名を付け、その後我が家で引き取ることになり、今に至ります。私も妻も、猫を飼った経験がなく、一大決心でしたが、今では、ショボ君は常に家族の笑い中心におり、なくてはならない存在になりました。

今思えば、あの時の異動がなければ、あの時一軒家に住んでいなかったら、あの時家族で子猫の餌やりをしていなければ・・・と、幾つもの偶然が重なっていることに気が付きます。ショボ君との出会いは運命だったのではとも思っています。掛かりつけ獣医師は、動物愛護センターの事業でご一緒させていただいた脇本雄樹 Vet (西京の森) にお願ひしています。



〈キャットタワーの上でくつろぐショボ君(♂去勢5歳)〉

その頃、共同獣医学部の佐藤晃一先生と仕事上でのご縁があり、「三方良し」の理念の下、シェルターメディスン実習などの同学部との交流事業に手を付けることになりました。現在も続いているようで、卒業生として少しはお役に立てたのかなと思っています。

県庁生活最後の3年間は本庁勤務となり、その間に、大島大橋の事故など多くの事件が起き、その対応に心身をすり減らす毎日を送ることもありました。その都度、沢山の人の出会いと助けにより、大過なく県庁を卒業することができました。

最後になりますが、県庁時代には、本当に多くの人との出会いがあり、それぞれに影響を受けて、今の自分の生活があるのだと、日々感謝をしています。現在、獣医学とは無関係の分野で働いていますが、動物愛護推進員や県獣医会の監事も引き受けており、今後とも何らかの形で「獣医」という分野に関わっていきたいと思っています。



## ごあいさつ

### 西京の森どうぶつ病院

脇本 雄樹 (V51)

平成11年4月入学の脇本雄樹です。7年前に西京の森どうぶつ病院（山口市）を開業し、獣医師として、そして院長として日々を過ごしています。

大学3年時に学生結婚して一児の父となり、大学6年時には二児の父となった私は、獣医解剖学研究室の木曾先生をはじめ、多くの先生や同級生、先輩後輩の方々に助けられ、無事に大学を卒業し社会人となることができました。研究室で貢献できたことと言えばソフトボールが得意だったことくらい。勉強の方はからきし苦手だったため、国家試験の結果が出るまでご心配・ご迷惑をお掛けしました。本当にありがとうございました。

さて、こんな大学生活を過ごした私ですが、最近では地域の小学校や中学校からの講話依頼を頂くことがあります。小学生に対しては『二分の一成人式』、中学生に対しては『将来の職業や生き方について働く人から学ぶキャリア学習』として、自分の歩んできた道筋などを思い返しながら、子供たちが将来の夢について考えるひとつのきっかけになれば、とお話しさせていただいています。

私自身の経験から言うと、小学生や中学生の頃には将来の職業など考えていませんでした。高校生になっても将来のことなど深く考えずに大学へ進学し、運よく将来の自分を見つめなおす機会が訪れたことで、山口大学工学部を途中で休学、センター試験から再受験をし直し、山口大学農学部獣医学科へ入学することができました。同級生と比べて遠回りをしていますが、将来の職業を真剣に考え、目標ができた後に獣医師になった経験から『願いは、努力すれば必ず叶う』と思っていますし、今もその経験が原動力になっています。

講話依頼を頂いたことをきっかけに幼少期からの生活を思い返すと、私は動物との関わりがとても深く、さも獣医師になりそうな境遇だったのだなあと感じましたので、今回はそのことについてお話したいと思います。

私は、三兄弟の末っ子として温和な両親と優しい兄に可愛がられ、自由に伸び伸びと育ててもらいました。毎日のように徳山動物園（山口県周南市）へ、兄二人と一緒に遊びに行っていました。飼育員さんにも可愛がってもらい、カバの背中によく乗せてもらっていたことを覚えています。（現在、徳山動物園にいるマルちゃんのお母さんカバの背中に乗せてもらっていたのだと思います。）特にカバと象が好きで、今でも毎年数回は徳山動物園に遊びに行っています。私が大好きだったマリ（長年、国内唯一のマルミミゾウとして親しまれてきたが、後にDNA鑑定でサバンナゾウだったことが判明した）という象がいましたが、約10年前に亡くなり、現在では動物園のリニューアルが進み、ミリンダとナマリー（スリランカゾウ）の立派な象舎ができています。また、数年前からビントロング（ジャコウネコ科）などの新しい仲間も増え、何度遊びに行ってもついつい長居してしまいます。

また、幼少期に動物園で買ってもらった黄色いゾウのぬいぐるみがお気に入りです。小学校低学年の頃まで肌身離さず生活しており、かなり不衛生なぬいぐるみになっていたと思います。動物図鑑も好きでした。自宅では、気に入った動物を切り抜いて遊んでいました。図鑑を切って遊ぶなど今の私には考えられませんが、両親はよく許してくれたなあと広い心に感謝です。

小学生・中学生の頃に徳山動物園裏の社宅から引っ越し、周南市の田舎の一軒家で過ごしました。動物好きの母の影響で、犬・猫・ウサギ・インコ・メダカ・ウナギ・・・など、多くの動物が家にいました。庭の草取りをしてウサギ小屋へ投げ入れたり、川に仕掛けをして捕った魚をウナギの水槽に入れたりすることが日常でした。また、インコをふ化させたり、ヒメダカを繁殖させたりしている母の姿をよく見ていました。特に自宅のソファで猫が5頭の子猫を出産した時の感動は今でも覚えています。

また、当時飼育していた中型犬は外飼いで玄関に繋がれており、暖かい日には犬小屋でよく一緒に昼寝をしていました。夜には数匹の猫とウサギを抱いて毎日一緒に布団で寝ていました。子供の頃は全く意識していませんでしたが、猫は室内も外も自由に出入りしていたので、ノミも一緒に布団で寝ていたと思います…。

上記のように、自分の生き立ちを思い返してみると動物との関わりは深く、自然に動物が好きになり、一度目の大学生（山口大学工学部）になってからはありますが、将来の職業を真剣に考えたときに、自ずと獣医師を目指すことになったのだと思います。

しかし、同じ環境で育った兄は二人とも動物と関わる仕事に就いていません。人生って本当に分からないものだなあと考えさせられます。



〈西京の森どうぶつ病院スタッフや愛犬と共に〉

# 在校生より

## ケニア滞在記

### 獣医微生物学分野

5年 光永早紀

「光永さん、ケニア行ってみない？」

我らが獣医微生物学教室の早坂大輔先生から飛び出した唐突な言葉に戸惑った。その当時は、まさか本当にケニアへ行けるなんて思ってもいなかった。あれやこれやと準備が進み、気が付いたらナイロビの大地に立っていた。私にとって人生で初めての海外渡航であり、全てのことが不安だった。

ナイロビの空港に着くとすぐに、ナイロビ大学のAboge先生とPeter先生がとびきりの笑顔で出迎えてくれ、私の不安は全て吹き飛んだ。ナイロビ大学の獣医学部長へ挨拶をし、大学内を見学して回った。まだケニアにいるのだという実感が湧かないうちにホテルに戻り、布団に入るとすぐに眠ってしまった。

次の日から早速、ナイロビ大学での実習が始まった。ナイロビ大学獣医学部の5年生が班を作って何種類かの実習をローテーションしていたので、私たち日本人学生はバラバラに分かれて向こうの班に混ぜてもらい、一緒に実習を行った。班のメンバーは当然みんな初対面であるし、日本人は1人なので逃げ場はない。単語を並べてなんとか話すことはできたが、英語が全く聞き取れずに苦労した。初日で精神的に打ちのめされた私は、これから2週間もやっっていけないと思っていた。しかし向こうの学生との実習や交流を重ねるにつれて、コミュニケーションを怖がる必要はないことが分かってきた。ケニアの人はみな陽気で人懐っこく、何よりとても親切だった。休日には一緒に美術館やモールに行き、楽しい時間を過ごした。

実習は、Small animal clinic（小動物臨床）、Ambulatory（救急往診）、Internal medicine（大動物診療）、Theriogenology（繁殖検診）、Surgery（外科・手術手技）の5つで、小動物よりも大動物を扱う実習が多かった。大学の動物病院も1日あたりの来院が3~4件らしく、二次診療施設といよりは一次診療施設に近かった。ケニアは小動物を伴侶動物として飼う文化があまりないのかもしれない。Ambulatoryでは学外の小さな農場へ行き、牛の身体検査や投薬を行った。最も印象深かったのはTheriogenologyで、牛の直腸検査を学生が素手で始めたときには目を疑った。平気な振りをして私も手を突っ込んだが、本当は今にも叫びだしたい気持ちだった。その日から数日は、手を使って物を食べられなかった。







ナイロビでの2週間はあっという間で、みんなとの別れを惜しむ間もなく出発の日になった。このままケニアに残りたい、もっと友達と一緒にいたいと口々に言いあいながら、私たちはケニアを後にした。最初は実現するなんて思っていなかったケニアでの2週間だったが、私にとって本当に素晴らしい2週間だった。この経験は間違いなく、私の人生の中で大きな意味をもつだろう。再びケニアの仲間に出会に行くその時まで、私はここで獣医師として立派に成長しなければならないと強く感じた。

終わりに

2週間の間、平日も休日も私たちを大学まで送迎して下さった Aboge 先生と Peter 先生には感謝してもしきれません。ナイロビ大学の生徒はみなとても親切で、私が何度英語を聞き返しても丁寧に返してくれました。また、このプロジェクトを主体となって進めてくださった早坂先生、私たち4人を2週間の間引率して下さった清水先生と下田先生、様々な手続きをサポートして下さった山口大学の事務の方々、私たちの旅を支えてくださった後援会の皆様に、この場をお借りして感謝を申し上げます。本当に良い2週間でした。

Asante sana



# 支部だより

## 青山会大阪支部と

### V27 同窓会 2022

#### 青山会副会長 吉内龍策 (V27)

青山会の副会長を拝命いたしております大阪の吉内です。2018年3月19日に設立総会が開かれ、山口大学共同獣医学部同窓会としての青山会の活動がじんわりと始まり、会報第1号がホームページに公開されたのが2019年10月11日でした。奇しくも2019年年末に中国の武漢で新型コロナウイルスが初めて確認され、2020年初頭から急速に世界中に感染を拡大したのでした。

青山会大阪支部の組織づくりが急がれる中、新たに同窓会支部を立ち上げることの難しさを新型コロナが後押しする格好で、未だ支部の体をなさない状況が続いておりますこと、誠に申し訳なく、残念に思っております。

一方で農学部獣医学科27期の学年同窓会も卒業以来毎年欠かすことなく開催されておりましたが、こちらも2019年11月のつくば同窓会を最後に新型コロナに粉碎されておりました。27期一同「どの学年よりも仲の良い学年」と自負しておりますが、新型コロナの脅威の前には為すすべもありませんでした。

そして武漢から3年を経過しようという本年10月15日、安芸の宮島で遂に再開にこぎつけました。

たかが3年、されど3年。気が付けば学年の全員が65歳以上の高齢者。さながら老人会の遠足に見えるのではとの危惧もどこ吹く風、前泊のゴルフ組が6名、ロープウェイにも乗らずに標高535mの「弥山」を自分の足で登ったつわもの2名、コロナ予防対策で時間制限のあった宴会には15名が参加し、その後遅くまで大部屋に集まって昔話に花が咲いたのでした。新型コロナに振り回された同窓会でしたが、リスタートにふさわしい思い出深い同窓会として記憶に残る集まりとなりました。





こんな風に横のつながりは大変に強い獣医学科の同窓会ですが、各々の地域での集まりとなると、なかなかまとまりのないものです。

大阪支部（近畿一円）で一度集まり、一杯飲むだけの会でも開催できればと考えております。お知らせを何らかの形でお届けできればと思っておりますので、その折にはご参加の程、よろしくお願い申し上げます。何か楽しそうな企画があれば吉内までご連絡をお願いしますね。



① コロナ禍が少し落ち着いて、3年越しの同窓会は実に楽しかった。全員立派な高齢者の部類に入り、思慮分別をわきまえたいいオトナです。

いいニュースもなく、年々孤独を感じていく私にとって、同窓会はストレス発散の場と、ほっとした息抜きになり、明日への活力につながりました。

吉沢直樹

(つわもの一人＝吉沢くんの雄姿と参加後のEメールの抜粋です。)



## 研究室のいま

### 獣医寄生虫学研究室

獣医寄生虫学研究室の柳田哲矢です。早いもので、2014年4月に着任してから8年が過ぎました。私自身は山口に来てから結婚し、娘も生まれ、人生の大転換期を迎えました。人の縁にも恵まれ、山口での生活を満喫しています。もともと水産系の学科で養殖魚の寄生虫病を研究していた私ですが、前任の旭川医科大学時代に研究テーマであるエキノコックス症や有鉤囊虫症などの人獣共通感染症を通して獣医学との接点を持ちました。獣医学は多様な生物を研究対象にできる懐の深い学問分野ですので、私のような経歴の人間でもすんなりと受け入れられてもらえました（と自分では思っています）。



〈美祿での水生昆虫・巻貝採集〉

2022年10月現在、研究室のメンバーは佐藤宏教授、私、大学院生4名（インドネシア、モンゴル、ブラジルからの留学生に社会人大学院生）と学部生6名で、男女比率はちょうど1:1となっています。コロナ禍でイベント事は難しい状況ですが、研究テーマを跨いで実験を手伝い合うなど、学生達も仲良くやっています。私が着任して以降の卒業生達は、各地の自治体やNOSAI、動物病院、社団法人で獣医師として活躍しています。時おり卒業生が研究室に顔を出してくれることもあり、近況を聞くのを楽しみにしています。卒業生の皆さん、近くに来た際にはぜひ、研究室にも遊びに来てください。

当研究室では、さまざまな寄生虫・寄生虫症を研究対象にしています。現在所属している学生達が主な研究テーマとしているのは、鳥類や哺乳類の住血性原虫類、ウマの円虫類、コウモリの吸虫、魚類の粘液胞子虫・微胞子虫などです。その他にも、変わったところではマボヤの被囊軟化症なんかも研究しています。感染症の病原体としてだけではなく、生態系の重要な構成成分としても寄生虫を捉え、多角的に研究を行っています。臨床現場で寄生虫の同定が必要な際など、ご気軽にお声掛けください。

国内の獣医寄生虫学研究室としては珍しく、水生生物の寄生虫を多く取り扱っているのも当研究室の特色と言えます。研究テーマに応じて、野外でのサンプリングにもしばしば行っています。海外の研究者とも積極的に共同研究をしており、新型コロナウイルスの流行以前は海外調査も実施していました。所属学生にはなるべく幅広い経験をしてもらいたいので、学会参加や調査旅行がしやすい世の中に早く戻って欲しいと思います。

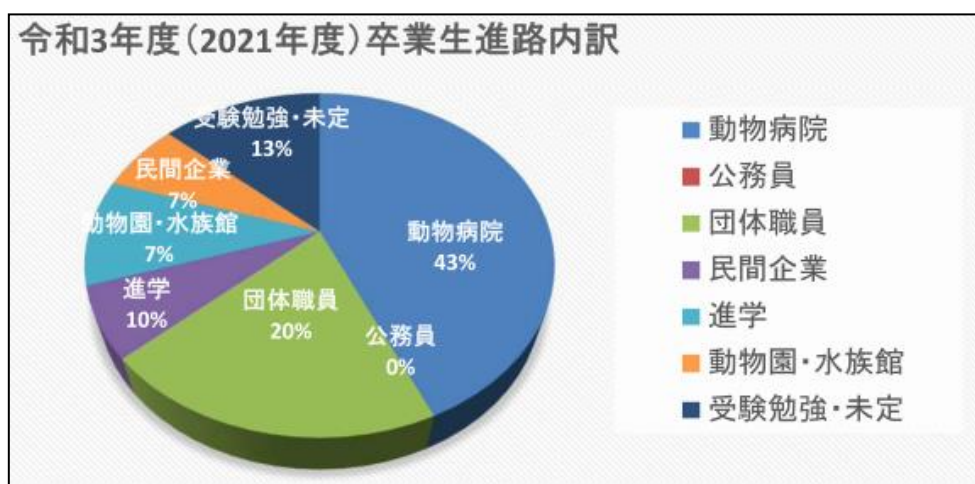


〈岩城島でのメダカ採集〉

獣医学部の学生は基本的にみんな生き物が好きなので、当研究室には“マニア”な生物好きがコンスタントに入室してくる印象です。おそらくそれは、一般的に獣医師が扱う動物種を超えて、多種多様な生物を研究対象にしているからでしょう。今後も多様性を大切にしながら、さまざまなテーマに取り組んでいきたいと思っています。

## 国家試験・卒業生進路情報

	第73回	第72回	第71回	第70回	第69回	第68回	第67回
	R3	R2	R1	H30	H29	H28	H27
受験者数	30	30	33	28	26	30	31
合格者数	25	30	28	27	26	26	26
合格率 [%]	83.3	100	84.8	96.4	100	86.7	83.9



### 編集後記

青山会会報第四号を、無事に発刊することができ、ほっとしています。投稿していただきました山口大学の先生方、先輩、後輩の皆さんに感謝いたします。

さて、私が所属している(公社)山口県獣医師会では、本年9月、山口市において「中国地区獣医師大会・獣医学術中国地区学会」を開催しました。3年ぶりに対面開催された各学会会場では積極的な質疑応答がなされ、2日間の延べ参加人数は550人を超える盛況な大会・学会となりました。

山口大学共同獣医学部の先生方には、学会の企画

の段階から協力していただき、また、開催当日は、先生方に加え、多くの学生の皆さんにも運営に協力していただきました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

今後とも、山口大学共同獣医学部の皆様の協力をいただきながら、本会所属獣医師の獣医学術・獣医療技術の向上普及に取り組んで参りますので、よろしく願いいたします(酒井, V28)。

毎度遅れてもうしわけありません!(上林, V53)

#### 山口大学共同獣医学部同窓会 青山会

事務局(代表:谷口 雅康)

〒753-8515 山口県山口市吉田 1677-1 山口大学共同獣医学部内 ☎ 083-933-5911

E-mail: vet-doso@yamaguchi-u.ac.jp

Web: <http://seizankai.vet.yamaguchi-u.ac.jp/>